

解説「明治政府の秩禄処分とその影響 ——武士階級の階級分化過程に関する一考察——」について

松沢 弘陽

本稿は東京女子大学丸山文庫に収蔵される、昭和九（一九三四）年度の、東京帝国大学法学部政治学科一年の必修科目、岡義武助教担当の「政治史」受講にあたって提出されたレポートである（資料番号三）。全編が「紀伊国屋製」と印刷された四〇〇字詰原稿用紙五一枚に書かれ、最後に「参考書」リストを付し、前後に扉をつけた上、厚紙の表紙をつけて仮製本した冊子に仕立ててある。またその間に、同じ原稿用紙に丁寧に書かれた断片的な下書一五枚と岡助教が講評した際のメモを後で渡された、ルーズリーフ一枚のメモとが挟まれている。

このレポートが、岡助教教授の「自分は講義は主としてヨーロッパで日本のことを十分にやれない。自分が勉強しているのは本当は日本のことだ……日本の政治史について論文を提出したら、試験の際、考慮する」ということばに込めて「優を一つ稼ごうと思って」書いた「大学時代の処女論文」（松沢弘陽・植手通有編『丸山眞男回顧談』上、一四五―一四六頁）であるという執筆のきっかけ、準備の勉強の内容、岡助教教授の行届いた講評については、右の『回顧談』上、一四五―一四六頁、下、一六六―一六七頁および、篠原一・三谷太一郎との鼎談の記録

「岡義武―人と学問―」（『岡義武著作集』第八巻付録、岩波書店、一九九三年。後『丸山眞男座談9』（岩波書店、一九九八年）に再録、本稿では『座談』による）二四―四四頁、二五三―五四頁に語られており、後者の方がいくらか詳しくまた正確なように思われる。

右に論及した丸山の証言とレポート末尾の「参考書」からうかがわれるように、丸山は一九三四（昭和九）年の夏から準備のために、『日本資本主義発達史講座』をはじめ多くの研究書と一次史料を読んでいるが、理論的に拠るところが最も大きかったのは、ちょうど一九三四年の四月に刊行された『日本資本主義社会の機構』に結実して大きな影響を及ぼした、いわゆる日本資本主義論争における講座派の指導的理論家平野義太郎の仕事であった。本稿「序論」の冒頭に記され、全編に繰返し現われる、「明治維新なるものの社会的・政治的意義」の、ひいては「明治新政権の本質」のとらえ方、さらに西欧の「ブルジョア革命」との比較史的視点は、基本的に平野に拠っている。その上で丸山は、当時まだ見るべき研究がほとんどなかったし、平野もふみこんでいない（『日本資本主義の機構』に付された詳しい事項索引にも秩

禄処分や士族授産は出ない) 秩禄処分と士族授産の問題(戦後早い時期までのこの問題の研究史については、歴史学研究会編『明治維新史研究講座』第四卷、平凡社、一九五八年、二四四―五三頁参照)に、第一次資料を用いて切りこみ、丸山がたびたび語った岡助教授の講評のことはを引けば、「立場一貫」(方法論的な立場が一貫し、論理的に首尾一貫した分析がなされているという意味であろう)した分析をなしたのである。丸山が法学部在学の最後の学年に緑会懸賞論文として提出した「政治学における国家の概念」が、審査した南原繁教授を師とする学問的歩みの道を開き、丸山の政治理論研究の出発点となったのに対し、このレポートは、岡義武と丸山の終生にわたる学問的な交わりの始めとなり、丸山の日本政治研究の礎になったといえよう(このレポート以後の丸山の日本研究の展開については、前記『回顧談』下、一六七―六九頁を参照)。

岡助教授のこの年の「政治史」講義内容については、前記『回顧談』上、一二七―二八頁、「岡義武一人と学問」二三九―四一頁、二四四―四七頁、二五五頁、二六五―六六頁に論及されており、東京女子大学丸山眞男文庫に収める「岡助教授 政治史I」(資料番号五三)および「岡義武助教授 政治史II」(資料番号七九〇―一)と題する、見事な受講ノート二冊によると、フランス革命からコミンテルンの現状までを扱っているが、日本については論じ及ばない。ノート第一冊の冒頭に「日本政治史」についての「参考書」のリストが記されており、その中の若干は、本レポートの「参考書」リストにも引かれているが、

服部之総『明治維新史』以外日本資本主義論争にかかわる文献は全くあげられていない。そのような背景から考えれば、丸山のレポートは、岡助教授にとっても驚きだったであろう。

本レポートは、既いのべたような経緯で作られ提出されたものであり、原稿整理には、大きな問題はなかったが、平仮名、片仮名は原文のままとし、文字の脱落やまちがいなどについては、適宜□で補ったり、「ママ」と記して、示した。レポート本文の上欄外に△と✓の印がある四箇所に注記したが、これは岡助教授の講評の内容と照合すると、講評に際して岡が記したものと思われる。講評は、レポート本文末に翻刻を収めた。

丸山のレポート本文の整理は川口雄一と松沢が、解説と注は山辺春彦と松沢が、それぞれ協力して行なった。

注

(1) 『日本資本主義発達史講座』との出会いとそこから受けた知的衝撃については、古在由重との対談「二 哲学徒の苦難の道」(『丸山眞男座談』5、岩波書店、一九九八年)、一一八―二〇頁および「二 哲学徒の苦難の道」(岩波現代文庫、岩波書店、二〇〇二年) 八四―八八頁を参照。